

講義科目名（コース名）	日本語学
名前	中崎 温子

Moodle 導入の際、丁寧な指導があったので、アナログ人間でも基本的な活用はできる。むしろ私のようなレベルの教員の興味を喚起し引き上げることも、情報教育を底上げしていくことにつながるのではないか、その意味で、はるか先を行く人とは真逆ではあるが貢献している存在かなと、時々にはポジティブに？考え自らを励ます。

さて、『日本語学』の授業の最初では、まず「Moodle 宣言」をし手順をプリントしたものを渡す。今年は、困った顔をする上級生が少なかった。オリエンテーションや Moodle 利用教科の拡がり、活用の手ほどきが浸透してきているのであろう。使う側の私もいつの間にか慣れてきて、基本的な部分ではマニュアルなしでも操作できるようになった。

「日本語学」は講義科目で、今年は 220 名余。Moodle 導入によって、資料印刷の手間が省ける。運ぶ必要もないし、配る必要もない。学生に渡る前に、内容の変更もできる。最良の点は、学生が数日前に授業内容を知ることができることだ。これは教育効果につながる。研究によれば、教わる内容の一定の「予測」は、学習の動機付けのみならず、理解力にかなりのプラスの影響があるという。また、資料をなくしても、あるいは、欠席しても、バックナンバーが

容易に手に入る。

こういった利便性は、教員の雑務が煩雑な状況で、大講義室の授業準備の効率化に役立つし、学生一人ひとりを把握することに限界がある点でも有効である。そのうち、自宅に居ながらにして PC で双方向性の授業を展開する日も近いかもしれない……。

ここまで想像すると、朝日の「天声人語」(2010.7.31)での仏の経済哲学者セルジュ・ラトゥーシュの「いくら経済が成長しても人々を幸せにしない・・・成長のための成長が目的化され、無駄な消費が強いられている」(2010.7.31)という言に立ち止まってしまった。「経済の成長」を「デジタル化の進化」に置き換えたらどうなるか。さらに、「天声人語」の終わり部分には、自然体験をアレンジするプロからの「今の子どもたちは情報の感じ方が目と耳だけになっている。手でさわる、においをかぐ、味わう。五感を全部よみがえらせると生き生きした子どもが戻ってくる」という引用を載せている。確かに、利便性を追求するあまり、教育的原点を見失ってはなるまい。例えば、資料をなくした学生が叱られることを覚悟で教員にもらいにくる場面を想定してみよう。その時の教員の目の表情、眉の動き、息遣い、学生との間（距離）の取り方、そして、資料を渡す際の一

言、起こりうる学生からの反応等々、こういったアナログ的な交流こそが基本であるということである。このバランスを常に意識していれば、今年140歳を超える安政時代生まれの最長老が町内に存在するという‘不可思議’は起こりうるはずがないと思われるのだが。。。。